

横浜市立 西柴小学校 学校評価報告書 (令和4～6年度)

重点取組分野	令和4年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
授業改善	①各単元や各授業の中で、子どもたちが主体的・対話的に資質・能力の獲得に向かっていけるような仕掛けの工夫を考え、②重点研究テーマを「ふれ合い まなび合い」として「ふれ合い」として「輝く子」を意識した授業づくりとし情報活用能力を生かして、自分の思いを表現したり伝え合ったりする子の育成をめざす。	①授業における対話の重要性を意識し、児童が自らの考えを表現したり、それを聞いて自分の考えを広げたり深めたりできるような発問や授業の組み立ての工夫を行った。②重点研究では、ICT端末の特徴を生かして、児童自らが自分の学びを確かめ、評価し、課題を見つけて主体的に学ぶ授業づくりについて研究をすすめた。①②の結果、児童の思いを表現する意欲を高め、伝え合う技能の可能性を広げることができた。	B
道徳教育	①豊かなかかわりの中で、自分を大切にし、互いの生き方を認めていく子を育てるため、道徳科を要として学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育を推進する。②道徳科年間指導計画に沿った、全学級の道徳科授業公開を年一回以上実施する。③自分の思いを書いたり、話したりする活動の中で自分自身を見つめたり、なりたい自分をイメージしたりすることができるようにする。	①8月に道徳研修を行い、児童が学習課題を自らの問題としてとらえ、多面的、多角的に考えられるように、教材理解のポイントや発問の工夫について学び合った。②土曜参観を利用して道徳の授業を公開したり、人権週間全校で人権に関する道徳の授業を行ったりした。③対話的な授業の他に、ICT端末を利用することで、友達や思いを共有しやすくなり、自分の考えと比較しながら学習できた。それは、自己や他者を尊重する心情を育てることにつながっていると考える。	B
健康教育	①早寝・早起きの励行、朝食を食べたり、適度な運動をしたりする等の健康的な生活習慣を身につける実践力を育てる。一養護教諭・栄養士・家庭科専科との連携を図る。②「ともきょう班遊び」を通して外遊びや運動の推進を図ることで、健やかな心と体を育み、楽しく体を動かし、たくましく生活できる力を育てる。	①各学年によって養護教諭・栄養士・家庭科専科との連携により基本的な生活習慣を身につける実践力を育てる。全校の取り組みとして、正しい健康習慣を推進した。②「ともきょう班遊び」を通して外遊びや運動の推進を図ることができた。ただし、もう少し運動する機会を増やし健やかな心と体づくりを行ってほしい。	B
自分づくり教育(キャリア教育)	①縦割り活動や地域等との交流を通して学校内外で他者とかかわり学ぶ機会を積極的に設け、その中で自分の思いを表現しながら一人ひとりが自己有用感を高めるようにする。②「自分づくりパスポート」を活用し、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返りしたりして、子ども自身の姿や成長を自己評価できるようにする。	①縦割り活動は活動回数を増やすことができ、異学年交流を通して特に高学年児童が達成感・自己有用感を高めることができた。また、学習や50周年記念行事を通して地域と関わり学ぶことができた。②「自分づくりパスポート」を活用し自己の姿や成長を感じることができた。来年度は学校だけでなく保護者とともに家庭でも成長をふりかえり、さらに自己肯定感を育てるようにしていきたい。	B
いじめへの対応	①いじめを積極的に認知し、子どもの心情に寄り添う。②月1回定期的にいじめ防止対策委員会を実施し、認知された案件の経過確認を丁寧に行うことで再発防止に努める。③夏のいじめ防止研修の他、いじめに関する情報等をこまめに共有して、全職員のいじめに対するアンテナを高くするとともに、年3回の児童アンケートにより些細な変化を見逃さない体制づくりをする。	①いじめを積極的に認知し、子どもや保護者に寄り添う支援を行った。②いじめ防止委員会では、案件の詳細を確認し再発防止や未然防止に務めた。③いじめ防止研修等で行いに対処する意欲を高くするとともに、学年研等でも児童指導に関する話題を上げ、いじめを見つめやすくなった。また、年に4回アンケートを取り、児童の心の中や変化を見逃さない体制づくりをする。	B
人材育成・組織運営(働き方)	①5年次以下の職員を中心にメンターチームを組織し、月1回の活動を継続して行う。メンターチームのメンバーで内容を自ら設定し、学べる体制をつくる。②ICTを活用した事務の効率化や情報の共有化を図るとともに、全職員の組織的な働き方改革につなげる。③高学年で、交換授業を行うことで、教材研究や事務処理の時間を確保する。	①メンターチームで活動計画を設定し、活動することができた。助言が入る場面もつくることができた。②Googleドライブやロコノートを活用し、情報の共有化ができた。使用方法の理解に関して、より職員内で理解を図ってほしい。③チーム学年経営を導入し、昨年度の高学年による交換授業をブロックで計画的に行えるよう努力した。職員配置等まだ課題は残るが、次年度以降も考えていきたい。	B
国際教育(オーストラリア交流)	①オーストラリアとの姉妹校交流を通して、学年の実態に応じて、目的意識をもったコミュニケーションの機会をもつ。(カード交流、文通、WEB会議など)②オーストラリアに対する児童の興味・関心、イメージがもてるよう、校内に国際交流コーナーを設置し、姉妹校からの写真を掲示する。	4年生だけだが、オンライン交流を行うことができた。子ども達は初めて会う海外の友達に興奮している様子で、すでに英語を話す姿勢が見られた。英語を話す必然性があり、とてもよい経験になったと考えた。ただ、日程の関係などでオンライン交流を継続すること、年間を通してオーストラリア交流への意欲づけをすることが難しく、課題に感じた。	B
幼保小中一貫	①幼稚園・保育園から小学校へ子どもの育ちと学びをつないでいくために、1年生が年間を通して近隣の幼稚園・保育園の園児たちと交流を深めていく。職員同士もお互い参観に行き来するなどして研究や交流をする。②小学校から中学校へつないでいくために、様々な場面で中学生との交流場面を図っていく。小学校児童と中学生と、子ども同士の活動を探っていく。	①職員同士お互い参観することは難しく、子どもたちは年長児を遊ばせたり、遊びに行ったりするなど直接交流することができた。喜んで年長児と関わる姿が見られスタートカリキュラムにも生かしていくと考えている。②小中一貫事業として、隔年で授業を公開し、小中両校教員の交流を行っている。また、中学校の職業体験生徒と児童の交流を図る場面が見られた。今後交流に関してはできることが無いのか探る必要がある。	B
GIGAスクール構想	ICT機器を効果的に活用し、個別最適な学び・協働的な学びの実現を目指していきます。職員のスキルアップを目指し、相互に情報交換をしていながら授業や業務への効果的な活用方法を見出していきます。児童も数ある情報や媒体を自ら取捨選択し、自分の意見や考えを表現していきけるよう支援していきます。	本校の重点教育研究会でICT機器の利用を含めた情報活用能力の育成を目指すことで、個別最適な学びに繋がっていくことができた。また、職員研修を通してのスキルアップや、様々な便利な機能を活用することで、次年度に向けた業務の簡素化に近づけることができた。情報モラル教育を充実させ、児童自身の確かなスキルアップに繋がってほしい。	A
縦割り班活動		縦割り活動を年間予定の中にしっかりと取り入れていくことで、異学年交流が活発に行われるようにしていきたい。コロナ禍において人との交流自体が減ってしまっている中で、縦割り活動を意図的に多く取り組むことによって、学校生活をより豊かなものにできるようにする。	B
ブロック内評価後の気づき	・小中一貫教育推進ブロック研究会では、小中一貫教育共通取組項目について、内容に沿った取り組みの情報交換を行った。		
学校関係者評価	・縦割り活動で、異学年の交流が見られたのがよい。卒業した後も、関係性が続いていることがとてもよい。 ・校外学習が児童に高評価であったことがよい。 ・児童のことをほめることも大事だが、そのためには先生の時間、気持ちに余裕がないと厳しい。もっと先生をほめることも大事だと感じる。	・学校は情勢等もふまえ、工夫した取り組みをしてくれている。その工夫を保護者の方が理解するために、説明の仕方が大事になると思う。また、時間が足りないのではないかと。 ・授業参観をする中で、学習意欲の高さを感じられた。担任の先生の手立てが成功していると感じる。 ・自信をもって活動している様子から、児童を大事に育てていることがわかる。 ・学校での活動を地域にフィードバックできれば地域や家庭にその活動が広がっていくだろう。	
中期取組目標振り返り	・新たな学校経営中期取組目標を掲げ、重点取組分野の目標に向けて、スタートした。重点取組分野の担当を明確にしたことで、それぞれの担当を深めることができた。 ・今年度より西柴中の学校運営協議会に参加した。協議会での提案を通し、協議会委員の方々からご意見をいただき、学校運営にいかしていきたい。	・縦割り活動の取組をより広げていけるように、活動計画を設定していく。 ・あいさつ運動を継続して取り組んできた。来年度以降も行うことで児童からのあいさつが多くなるよう取り組みを進めていく。	

重点取組分野	令和5年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
授業改善	①各単元や各授業の中で、子どもたちが主体的・対話的に資質・能力の獲得に向かっていけるような仕掛けの工夫を考え、②重点研究テーマを「ふれ合い まなび合い」として「ふれ合い」として「輝く子」を意識した授業づくりとし情報活用能力を生かして、自分の思いを表現したり伝え合ったりする子の育成をめざす。	①授業における対話の重要性を意識し、児童が自らの考えを表現したり、それを聞いて自分の考えを広げたり深めたりできるような発問や授業の組み立ての工夫を行った。②重点研究では、プログラミングの思考の育成に重点を置きながら、ICT端末の特徴を生かして、児童自らが自分の学びを確かめ、評価し、課題を見つけて主体的に学ぶ授業づくりについて研究をすすめた。①②の結果、児童の思いを表現する意欲を高め、伝え合う技能を広げることができた。	B
道徳教育	①豊かなかかわりの中で、自分を大切にし、互いの生き方を認めていく子を育てるため、道徳科を要として学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育を推進する。②道徳科年間指導計画に沿った、全学級の道徳科授業公開を年一回以上実施する。③自分の思いを書いたり、話したりする活動の中で自分自身を見つめたり、なりたい自分をイメージしたりすることができるようにする。	①8月に道徳研修を行い、児童が学習課題を自らの問題としてとらえ、多面的、多角的に考えられるように、教材理解のポイントや発問の工夫について学び合った。②土曜参観を利用して道徳の授業を公開したり、人権週間全校で人権に関する道徳の授業を行ったりした。③対話的な授業の他に、ICT端末を利用することで、友達や思いを共有しやすくなり、自分の考えと比較しながら学習できた。それは、自己や他者を尊重する心情を育てることにつながっていると考える。	B
健康教育	①早寝・早起きの励行、朝食を食べたり、適度な運動をしたりする等の健康的な生活習慣を身につける実践力を育てる。一養護教諭・栄養士・家庭科専科との連携を図る。②「ともきょう班遊び」を通して外遊びや運動の推進を図ることで、健やかな心と体を育み、楽しく体を動かし、たくましく生活できる力を育てる。	①各学年によって養護教諭・栄養士・家庭科専科との連携により基本的な生活習慣を身につける実践力を育てる。全校の取り組みとして、正しい健康習慣を身につけるよう推進した。②「ともきょう班遊び」を通して外遊びや運動の推進を図ることができた。長編の活動時間を増やしたが、もっと健やかな心と体づくりを行ってほしい。	B
自分づくり教育(キャリア教育)	①縦割り活動や地域等との交流を通して学校内外で他者とかかわり学ぶ機会を積極的に設け、その中で自分の思いを表現しながら一人ひとりが自己有用感を高めるようにする。②「自分づくりパスポート」を活用し、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返りしたりして、子ども自身の姿や成長を自己評価できるようにする。	①縦割り活動は活動回数が増やすことができ、異学年交流を通して特に高学年児童が達成感・自己有用感を高めることができた。②「自分づくりパスポート」にも子ども自身の振り返りを蓄積し、年度末に見直して自己の成長を自覚できるようにした。	B
いじめへの対応	①いじめを積極的に認知し、子どもの心情に寄り添う。②月1回定期的にいじめ防止対策委員会を実施し、認知された案件の経過確認を丁寧に行うことで再発防止に努める。③夏のいじめ防止研修の他、いじめに関する情報等をこまめに共有して、全職員のいじめに対するアンテナを高くするとともに、年3回の児童アンケートにより些細な変化を見逃さない体制づくりをする。	①いじめを積極的に認知し、子どもや保護者に寄り添う支援を行った。②いじめ防止委員会では、案件の詳細を確認し再発防止や未然防止に務めた。③いじめ防止研修等で行いに対処する意欲を高くするとともに、学年研等でも児童指導に関する話題を上げ、いじめを見つめやすくなった。また、年に4回アンケートを取り、児童の心の中や変化を見逃さない体制づくりをする。	B
人材育成・組織運営(働き方)	①5年次以下の職員を中心にメンターチームを組織し、月1回の活動を継続して行う。メンターチームのメンバーで内容を自ら設定し、学べる体制をつくる。②ICTを活用した事務の効率化や情報の共有化を図るとともに、全職員の組織的な働き方改革につなげる。③高学年で、交換授業を行うことで、教材研究や事務処理の時間を確保する。	①メンターチームで活動計画を設定し、活動することができた。実技の講習を取り入れ、授業に役立つ学びの場をつくることができた。②Googleドライブやロコノートを活用し、情報の共有化ができた。使用用途の幅を広げ、より職員内で理解を図ってほしい。③教科担任をすすめることで、教材研究、事務処理の時間を確保するとともに、児童理解にも役立てられた。	B
国際教育(オーストラリア交流)	①オーストラリア姉妹校プログラム終了のため、重点的な取り組みは行わないこととする。	オーストラリア姉妹校プログラム終了のため、重点的な取り組みは行わないこととする。	
幼保小中一貫	①幼稚園・保育園から小学校へ子どもの育ちと学びをつないでいくために、1年生が年間を通して近隣の幼稚園・保育園の園児たちと交流を深めていく。職員同士もお互い参観に行き来するなどして研究や交流をする。②小学校から中学校へつないでいくために、様々な場面で中学生との交流場面を図っていく。小学校児童と中学生と、子ども同士の活動を探っていく。	①子どもたちは、昨年度より年長児と直接交流する機会が増え、喜んで活動する姿が見られた。それぞれの子どもたちの様子を職員間で共有することもできたのでスタートカリキュラムの手直しをしていきたい。 ②今年度も小中一貫事業として、隔年で授業を公開し、小中両校教員の交流を行ってきたい。	B
GIGAスクール構想	ICT機器を効果的に活用し、個別最適な学び・協働的な学びの実現を目指していきます。職員のスキルアップを目指し、相互に情報交換をしていながら授業や業務への効果的な活用方法を見出していきます。児童も数ある情報や媒体を自ら取捨選択し、自分の意見や考えを表現していきけるよう支援していきます。	本校の重点教育研究会で、プログラミング教育について取り組んだり、日頃の授業の中でICT機器の利用を活かして行ったりすることで、情報活用能力の育成を目指しながら、個別最適な学びに繋がることができた。また、職員研修を通してのスキルアップを行うことで、校務改善に繋がることができた。今後も情報モラル教育を充実させ、児童自身の確かなスキルアップに繋がってほしい。	A
縦割り班活動		コロナ禍で大幅に減っていた縦割り活動を、徐々に戻していった。縦割り班で遊ぶ活動を、5月、9月、12月に実施した。6月には、全校で縦割り遠足として海の公園に行き、異学年の交流を進めた。また、縦割り班を始めて、新体力テストや長編の活動などを行ってほしい。今後、さらに異学年交流を深めていくために、年間を見通して縦割り班を生かして活動できる場面を模索し、共有していきたい。	B
ブロック内評価後の気づき	・小中一貫教育推進ブロック研究会では、小中一貫教育共通取組項目について、内容に沿った取り組みの情報交換を行った。 ・小学校で行っているデジタルドリルが効果的だった。 ・オンライン配信について中学校での現状を教えてもらい、小学校でのオンライン授業の導入の仕方について検討した。 ・SDGsの取組について、中学校の活動についての情報を聞き、小学校での活動を系統をもとに考えた。		
学校関係者評価	・学校は情勢等もふまえ、工夫した取り組みをしてくれている。その工夫を保護者の方が理解するために、説明の仕方が大事になると思う。また、時間が足りないのではないかと。 ・授業参観をする中で、学習意欲の高さを感じられた。担任の先生の手立てが成功していると感じる。 ・自信をもって活動している様子から、児童を大事に育てていることがわかる。 ・学校での活動を地域にフィードバックできれば地域や家庭にその活動が広がっていくだろう。		
中期取組目標振り返り	・新たな学校経営中期取組目標を掲げ、重点取組分野の目標に向けて、スタートした。重点取組分野の担当を明確にしたことで、それぞれの担当を深めることができた。 ・今年度より西柴中の学校運営協議会に参加した。協議会での提案を通し、協議会委員の方々からご意見をいただき、学校運営にいかしていきたい。	・縦割り活動の取組をより広げていけるように、活動計画を設定していく。 ・あいさつ運動を継続して取り組んできた。来年度以降も行うことで児童からのあいさつが多くなるよう取り組みを進めていく。	

重点取組分野	令和6年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
授業改善	①各単元や各授業の中で、子どもたちが主体的・対話的に資質・能力の獲得に向かっていけるような仕掛けの工夫を考え、②重点研究テーマや学校教育目標の実現にむけて、自分の思いを表現したり伝え合ったりする子の育成をめざす。		
道徳教育	①豊かなかかわりの中で、自分を大切にし、互いの生き方を認めていく子を育てるため、道徳科を要として学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育を推進する。②道徳科年間指導計画に沿った、全学級の道徳科授業公開を年一回以上実施する。③自分の思いを書いたり、話したりする活動の中で自分自身を見つめたり、なりたい自分をイメージしたりすることができるようにする。④「道徳教育は日常のあらゆる機会を捉えて行うこと」「評価で、年間の道徳的な見方・考え方の姿をみとめるための工夫」「対話的な授業を目指す授業の工夫」などについての研修を、年度初めに行う。		
健康教育	①早寝・早起きの励行、朝食を食べたり、適度な運動をしたりする等の健康的な生活習慣を身につける実践力を育てる。一養護教諭・栄養士・家庭科専科との連携を図る。②「ともきょう班遊び」を通して外遊びや運動の推進を図ることで、健やかな心と体を育み、楽しく体を動かし、たくましく生活できる力を育てる。		
自分づくり教育(キャリア教育)	「自分づくりパスポート」を活用し、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返りしたりして、子ども自身の姿や成長を自己評価できるようにする。		
いじめへの対応	①いじめを積極的に認知し、子どもの心情に寄り添う。②月1回定期的にいじめ防止対策委員会を実施し、認知された案件の確認を丁寧に行うことで再発防止に努める。③夏のいじめ防止研修の他、いじめに関する情報等をこまめに共有して、全職員のいじめに対するアンテナを高くするとともに、年3回の児童アンケートにより些細な変化を見逃さない体制づくりをする。		
人材育成・組織運営(働き方)	①5年次以下の職員を中心にメンターチームを組織し、月1回の活動を継続して行う。メンターチームのメンバーで内容を自ら設定し、学べる体制をつくる。②ICTを活用した事務の効率化や情報の共有化を図るとともに、全職員の組織的な働き方改革につなげる。③高学年で、交換授業を行うことで、教材研究や事務処理の時間を確保する。		
国際教育(オーストラリア交流)	オーストラリア姉妹校プログラム終了のため、重点的な取り組みは行わないこととする。		
幼保小中一貫	①幼稚園・保育園から小学校へ子どもの育ちと学びをつないでいくために、1年生が年間を通して近隣の幼稚園・保育園の園児たちと交流を深めていく。職員同士もお互い参観に行き来するなどして研究や交流をする。②小学校から中学校へつないでいくために、様々な場面で中学生との交流場面を図っていく。小学校児童と中学生と、子ども同士の活動を探っていく。		
GIGAスクール構想	ICT機器を効果的に活用し、個別最適な学び・協働的な学びの実現を目指していきます。職員のスキルアップを目指し、相互に情報交換をしていながら授業や業務への効果的な活用方法を見出していきます。児童も数ある情報や媒体を自ら取捨選択し、自分の意見や考えを表現していきけるよう支援していきます。令和6年度も引き続き効果的な活用方法について研修をつみながら児童のみならず、職員のスキルアップをはかり、校務改善にも繋がってほしい。		
縦割り班活動	縦割り活動を年間予定の中にしっかりと取り入れていくことで、異学年交流が活発に行われるようにしていきたい。コロナ禍において人との交流自体が減ってしまっていたが、令和5年度から、活動を再開できた。令和6年度も引き続き、縦割り活動を意図的に多く取り組むことによって、学校生活をより豊かなものにできるようにする。		
ブロック内評価後の気づき			
学校関係者評価			
中期取組目標振り返り			